

中央アジアの日本人抑留者

ふじもと とうこ 藤本 透子 民博 民族文化研究部

現地で語り継がれる記憶

第二次世界大戦後のソ連による抑留といえは、シベリア抑留が有名である。しかし、中央アジアにも日本人が抑留されていたことは、あまり知られていない。その数はカザフスタンで約六万人、ウズベキスタンで約二万人におよぶといわれる。日本における認知度の低さとは裏腹に、じつは中央アジアでは日本人抑留者の記憶が脈々と受け継がれている。

わたしがカザフスタンで初めて日本人抑留者について聞いたのは、一九九九年に留学のため現地に到着した日のことだった。滞在先のカザフ人女性がレコードをかけると、戦前のものとおぼしき日本語が雑音のむこうから響いてきた。レコードは女性の両親が抑留者との物々交換で手に入れ、六〇年近く大切に保管してきたという。日本人抑留者は、鉄道の敷設、建物の建設、炭鉱労働などに従事し、ウズベキスタンのナヴァアイー劇場やカザフスタンの科学アカデミーなど今に残る重要な建物を建設したことで人びとに知られている。



日本人抑留者が建設したカザフスタン共和国科学アカデミー（ソ連時代から続く最高学術機関）

多民族状況を生き延びた抑留者たち

日本人が抑留されたこの地域は、複雑な多民族状況にある。カザフスタンにはロシア人が多いほか、第二次世界大戦前には政治的な理由から、朝鮮人、ドイツ人やカフカースの少数民族も強制移住させられ、戦後にはドイツ人捕虜や日本人捕虜が抑留されていた。年配のタタール人女性は、「四、五歳のころ、日本人が仕事場へと毎日トラックで移送されて行く後を、バンザイ、バンザイと叫びながら近所の子どもたちと追いかけると、日本人はみんな笑って手を振ってくれた。ドイツ人は怖い存在だったが日本人には親しみを覚えた」と語る。

一九五〇年代までに抑留者の多くは帰国したが、一部の人が取り残された。その一人である日本人男性はドイツ人女性とのあいだに二児をもうけたが、ソ連の敵国出身者として法的結婚は認められなかった。一九九一年のソ連崩壊にもないカザフスタンが独立すると、日本人男性

の子はドイツに移住できたが、男性はともに移住できずやむなく日本へと帰還した。まさにこの多民族状況と政治変動の生き証人である。こういった日本人の中央アジア抑留をとおして、今に続くユーラシアの激動が見える。